

<実践報告・調査報告>

初年次科目を担当する学生ファシリテータの活動参画意欲分析

中沢 正江¹・大島 和美²・宮崎 知美²・中尾 麻衣²

高校までの学習から、大学における学習への転換期となる初年次教育プログラムでは、多くの学生スタッフが新生の学びの支援を行っている。学生スタッフの参画意欲も初年次教育プログラムの有りようによって様々と考えられる。本研究では、京都産業大学の初年次共通教育科目である「自己発見と大学生活」で活躍する学生ファシリテータを対象として、活動への参画意欲について分析する。具体的には、まず当該科目の受講生（新生）を対象として実施した「学生ファシリテータ効果調査」の結果から、学生ファシリテータが受講生の学習に与える影響を確認する。その後、学生ファシリテータを対象として実施した「学生ファシリテータ活動状況・成果調査」の結果から、特に活動への参画意欲に関連する項目に着目して考察する。結果として、当該科目において学生ファシリテータの存在が学習に欠かせぬ役割を果たしていること、学生ファシリテータは活動の中で成長実感を得ており、そのことが参画意欲の中心であろうことが確認された。

キーワード：学生スタッフ、参画意欲、初年次教育、ファシリテーション

1. はじめに

国内において、初年次教育プログラムは多様に展開されている。国内の初年次教育プログラムは、1910年代から広まったフレッシュマンセミナーにその原型をみることが出来る。その後、フレッシュマンセミナーは、新生の大学生活支援の要素を含む内容に単位付与することに対する教員の反対が強まり一度は衰退したものの、1960年代の大学入学者急増による大学のマス化への対応として再び米国で着目され、多様に展開されるに至った。このような初年次教育の多様性について国内でも同様であると西山（2010）はいう。また、西山（2010）は、米国の初年次教育の特質は、多様なプログラムの形態が存在する一方で、少人数のグループを形成させ、グループの中での教員と学生あるいは学生同士の触れ合い、討論によって学生の能動的な思考を促し人間形成、自己確立に導くことが教育プログラムに横断した共通の教育指針として意図されていることであり、この点が伝統的なリベラル・アーツの核心に通じているという。

京都産業大学の初年次共通教育科目である「自己発見と大学生活」は、66名/クラスという講義サイズのクラス展開でありながら、5、6名1グループのグループワークを中心とし、互いの価値

観や学習への志向性を他者と対話しながら確認し、授業での対話を振り返って言語化し（自己内対話し）、明確にしていくプログラムとなっている（中沢・松尾 2017）。2021年度は例年通り専任教員を中心とした30クラス体制で運営された。ただし、新型コロナウイルス感染症の感染者数の推移から、全15回のうち、第1回のみを対面授業で実施し、その後はZoomまたはMicrosoft Teamsを使用したリアルタイムオンラインを基本とした遠隔授業の形で実施された。

「自己発見と大学生活」では、科目を運営者として教員と共に支える学生スタッフ「学生ファシリテータ」が1クラスに2～3名配置され、活躍している。学生ファシリテータは基本的に「自己発見と大学生活」の元受講生の2年次生以上の学生であり、単位もアルバイト代も支給されない無償のボランティアスタッフである。2021年度は、46名の学生ファシリテータがそれぞれ1～3クラスを担当し、全15回の授業に参加した。

本稿では、この学生ファシリテータが、どのような参画意欲から「自己発見と大学生活」に関わっているのかについて、受講生を対象として実施した質問紙調査「学生ファシリテータ効果調査」および、学生ファシリテータを対象として実施した質問紙調査「学生ファシリテータ活動状況・成果調査」の結果から考察して報告する。

¹ 京都産業大学 共通教育推進機構、² 京都産業大学 教育支援研究開発センター事務室 F工房

2. 調査概要

ここでは、2021 年度春学期「自己発見と大学生活」の受講生を対象とした「学生ファシリテータ効果調査」および、当該科目を担当した学生ファシリテータを対象とした「学生ファシリテータ活動状況・成果調査」の概要について述べる。

2.1. 学生ファシリテータ効果調査

まず、本報告で取り扱う学生ファシリテータが、初年次教育プログラム「自己発見と大学生活」で果たしている役割を把握するため、本科目で実施している「学生ファシリテータ効果調査」について述べる。

本調査は例年実施しているが、本稿では 2021 年度について取り扱うため、2021 年度の実施概要を確認する。以下の通りである。

- (1) 調査対象：2021 年度「自己発見と大学生活」受講生 1,970 名
- (2) 調査期間：授業終了時 2021 年 7 月 26 日～2021 年 8 月 6 日
- (3) 実施方法：web 調査。2021 年度は第 2 回授業以降を遠隔授業で実施したため、例年の対面で用紙を使用した調査を実施せず、代替として Microsoft Forms を使用して実施した。
- (4) 回収率：回答者 1,283 名となり、回収率は 65.1% であった。

本調査の結果については、続く「3.『自己発見と大学生活』における学生ファシリテータの役割」にて述べる。

2.2. 学生ファシリテータ活動状況・成果調査

学生ファシリテータの「自己発見と大学生活」等における活動とその成果を把握するために実施している「学生ファシリテータ活動状況・成果調査」について述べる。

本調査は例年実施しているが、本項では 2021 年度について取り扱うため、2021 年度の実施概要を確認する。以下の通りである。

- (1) 調査対象：2021 年度「自己発見と大学生活」で活動した学生ファシリテータ 46 名
- (2) 調査期間：授業終了時 2021 年 7 月 30 日～2021 年 8 月 19 日
- (3) 実施方法：web 調査。2021 年度は第 2 回授業以降を遠隔授業で実施したため、例年の対面で用紙を使用した調査を実施せず、代替として Microsoft Forms を使用して実施した。

- (4) 回収率：回答者 35 名となり、回収率は 76.1% であった。

本結果については、「4. 学生ファシリテータ参画意欲」にて述べる。

3. 「自己発見と大学生活」における学生ファシリテータの役割

3.1. 科目の効果の直接の要因としての学生ファシリテータ

2.1 で述べた「学生ファシリテータ効果調査」の結果のうち、科目で得られた効果とその要因についてまとめたものが、図 1 である。

図 1a の「京都産業大学に対して、より親しみを持った」については、92.9% の受講生が肯定的に回答している。肯定的に回答した受講生の 62.3% がその要因として「学ファシの存在」を挙げており、「自分の意見・主張を他の受講生とやり取りしたこと (70.2%)」に次ぐ結果となっている。

図 1c の「他学部の学生・学問内容に興味を持った」については、85.3% の受講生が肯定的に回答しており、こちらも「学ファシの存在」は要因として「自分の意見・主張を他の受講生とやり取りしたこと (82.2%)」に次ぐ結果となっており、26.3% であった。

図 1e 「自学部の学生・学びの内容の特徴を理解した」については、肯定的に回答した受講生は 76.3% であり、「学ファシの存在」を要因として回答しているのは 27.1% であった。なお、こちらも、もっとも要因として多く挙げられているのは他の受講生とのやり取りであり、71.9% であった。

これらの結果から、学生ファシリテータが当該科目で受講生に与えている影響は、他の受講生とのやり取りに次いで大きなものであることが確認できる。特に、他の 2 項目に比べ、京都産業大学により親しみを感じるという部分で大きな役割を果たしている。

3.2. 他の受講生とのやり取りを支える学生ファシリテータの機能

図 2 は、学生ファシリテータが科目内で具体的に果たしている役割について、受講生の視点から評価した結果である。なお、「4. 学ファシがいることで、ワークに集中できなかつたり、話し合いが途切れてしまつたりした」は反転項目であるが、集計時に反転せず、回答結果をそのまま集計している。どの項目においても学生ファシリテータの働きが高く評価されており、もっとも低スコアとなった「4. 学ファシがいることで、ワークに集中

できなかったり、話し合いが途切れてしまったりした」においても、77.8%の受講生が「どちらか」というとそう思わない」「そう思わない」と回答している。本項目は反転であるので、77.8%の受講生がワークへの集中や話し合いに学生ファシリテータがポジティブに作用したと回答しているということである。次に低スコアとなった項目が、87%がポジティブに評価している「9. 学ファシが

いたことで、授業への参加意欲が高まった」であり、学生ファシリテータが本科目において概ねの項目で9割の受講生にポジティブに評価されていると言える。

図2の項目のうち、1～10の設問は、図1でみた「他の受講生とのやり取り」を支える環境について、学生ファシリテータがいかに支えているかを見る設問である。

Q1. あなたは次のような変化が本科目の受講によりもたらされたと感じますか？

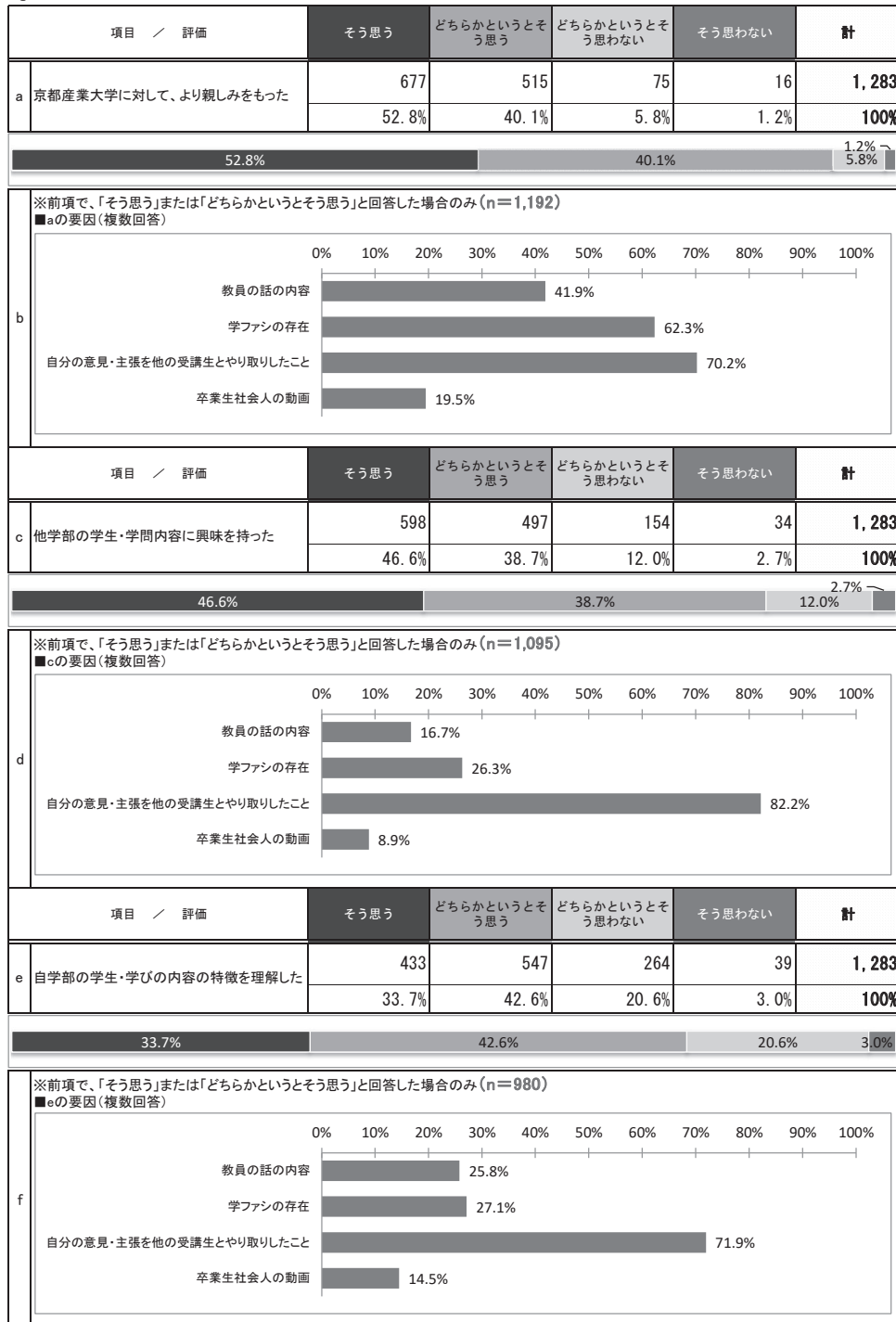


図1. 科目の効果と学生ファシリテータの存在

図1で見たように「他の受講生とのやり取り」が「自己発見と大学生活」においてもっとも大きな役割を果たしていることを踏まえた上で図2の結果を見れば、学生ファシリテータの存在は、本科目にとって無くてはならない存在であることが理解できる。

併せて、図2の11「自分も学ファシ活動をやってみたい」という項目に15.6%の受講生がポジティブに回答していることも確認しておきたい。

他の項目のスコアの高さに比べると、いかにも15.6%は少なく見えるが、単位もアルバイト代も出ない中、事前研修にも参加し、全15回の授業に参画する学生ファシリテータに、実人数として200名を超える受講生が「やってみたい」と回答している状況は、注目に値する。

Q2. 学生ファシリテータの行動や印象についてお伺いします

項目 / 評価	そう思う	どちらかというそう思う	どちらかというそう思わない	そう思わない	計
1 学ファシによるワーク(アイスブレイク等)の説明は分かりやすかった。	961 74.9%	288 22.4%	27 2.1%	7 0.5%	1,283 100%
74.9%					22.4% 0.5% 2.1%
2 アイスブレイクやワークの進行を学ファシが行ったことで、授業に親しみを感じることができた。	917 71.5%	319 24.9%	37 2.9%	10 0.8%	1,283 100%
71.5%					24.9% 0.8% 2.9%
3 グループワークが脱線したり行き詰ったりした時、学ファシがサポートをしたことで、話し合いがスムーズに進んだ。	786 61.3%	421 32.8%	59 4.6%	17 1.3%	1,283 100%
61.3%					32.8% 1.3% 4.6%
4 学ファシがいることで、ワークに集中できなかったり、話し合いが途切れてしまったりした。	166 12.9%	118 9.2%	325 25.3%	674 52.5%	1,283 100%
12.9% 9.2% 25.3% 52.5%					
5 学ファシは受講生と同じ目線に立って接してくれていると感じた。	875 68.2%	372 29.0%	27 2.1%	9 0.7%	1,283 100%
68.2%					29.0% 0.7% 2.1%
6 授業の中で分からないことや困ったことがあった時、学ファシに対して気軽に話しかけられる雰囲気があった。	725 56.5%	477 37.2%	68 5.3%	13 1.0%	1,283 100%
56.5%					37.2% 1.0% 5.3%
7 学ファシはグループワークの様子を温かく見守っているように見えた。	944 73.6%	318 24.8%	16 1.2%	5 0.4%	1,283 100%
73.6%					24.8% 1.2%
8 学ファシに質問したり助けを求めたりした時に、的確な返答やアドバイスが返ってきた。	847 66.0%	401 31.3%	28 2.2%	7 0.5%	1,283 100%
66.0%					31.3% 2.2%
9 学ファシがいたことで、授業への参加意欲が高まった。	545 42.5%	571 44.5%	117 9.1%	50 3.9%	1,283 100%
42.5%					44.5% 9.1% 3.9%
10 第3回の学ファシによる座談会発表または動画は、今後の大学生活での「学び方」「過ごし方」を考える上で参考になった。	641 50.0%	567 44.2%	58 4.5%	17 1.3%	1,283 100%
50.0%					44.2% 1.3% 4.5%
11 自分も学ファシ活動をやってみたい。	53 4.1%	148 11.5%	671 52.3%	411 32.0%	1,283 100%
4.1% 11.5% 52.3% 32.0%					

図2. 学生ファシリテータ活動の受講生からの評価

4. 学生ファシリテータ参画意欲

次に、2.2 で述べた「学生ファシリテータ活動状況・成果調査」の結果について、特に参画意欲に関連する項目を抜粋して述べる。

4.1. 受講生との関係性に関する満足度

まず、学生ファシリテータ活動のうち、受講生との関係性に関する満足度を問う 5 項目についての結果である (図 3)。

「2-21. 受講生と信頼関係を築くことができた」で 80%、「2-22. 受講生の学生生活に貢献するような情報提供ができた」91.4%、「2-23. 受講生の気づきや成長につながるフィードバックをすることができた」82.8%、「2-24. 受講生をサポートすることに対する意欲が高まった」94.3%、「2-25. 受講生の成長を実感できた」で 94.3% の学生ファシリテータがポジティブに回答している。全ての項目で 8 割を超えていることから、受講生との関係性について、「自己発見と大学生活」における活動について学生ファシリテータが概ね満足している様子が確認できる。

このことは、活動に関する総合的な満足度について問うた「4-8. 学ファシ活動をして良かったと思う」という設問について、100% の学生ファシリテータがポジティブに回答していることから確認できる。

4.2. 学生ファシリテータ活動から得られた成長実感

次に、学生ファシリテータとして活動することが、自身にどのような影響を与えたかを問う 20 項目についての結果である (図 4)。

際立って高いスコアが得られているものが、「3-4. グループワークに対する興味・関心が高まった」、「3-5. 他者の立場に立って他者を理解できるようになった」、「3-8. 他者の意見に耳を傾けられるようになった」の 3 項目であり、100% の学生ファシリテータがポジティブに回答している。逆に、最も低いスコアが得られたのは、「3-9. 自身が規則正しい生活を送れるようになった」で 45.7%、次いで「3-19. 人前で話をする際に、聴衆の目を見て話せるようになった」で、71.5% であった。

学生ファシリテータ活動によって、大学生生活のリズムを正す効果は半数以下の学生ファシリテータしか実感していないが、それ以外の項目で 7 割以上の学生ファシリテータがポジティブに回答しており、学生ファシリテータ活動は、ファシリテーションやグループワーク、プログラム開発への自身の興味・関心にポジティブな影響を与え、他者理解を深め、他者への関わり方を改善する効果(「3-12. 他者の意見を引き出すことができるようになった」「3-16. 他者の学びや成長を促すためのアプローチをとれるようになった」「3-20. 自分の

Q2.あなたの学ファシ活動の状況についてお聞かせください。

2-21	受講生と信頼関係を築くことができた	6	22	7	0	35
		17.1%	62.9%	20.0%	0.0%	100%
		17.1%		62.9%		20.0%
2-22	受講生の学生生活に貢献するような情報提供ができた	7	25	3	0	35
		20.0%	71.4%	8.6%	0.0%	100%
		20.0%		71.4%		8.6%
2-23	受講生の気づきや成長につながるフィードバックをすることができた	6	23	6	0	35
		17.1%	65.7%	17.1%	0.0%	100%
		17.1%		65.7%		17.1%
2-24	受講生をサポートすることに対する意欲が高まった	22	11	2	0	35
		62.9%	31.4%	5.7%	0.0%	100%
		62.9%		31.4%		5.7%
2-25	受講生の成長を実感することができた	23	10	2	0	35
		65.7%	28.6%	5.7%	0.0%	100%
		65.7%		28.6%		5.7%

図 3. 受講生との関わりに関する満足度

Q3.学ファシ活動の成果についてお聞かせください。

項目 / 評価	そう思う	どちらかというと思う	どちらかというと思う	そう思わない	計
3-1 学ファシ活動での経験を、他の活動に活かすことができた	12	19	3	1	35
	34.3%	54.3%	8.6%	2.9%	100%
3-2 今期の学ファシ活動を通じて、人前で話す際に以前より緊張しなくなった	16	13	4	2	35
	45.7%	37.1%	11.4%	5.7%	100%
3-3 他者と協力してものごとを進められるようになった	18	16	1	0	35
	51.4%	45.7%	2.9%	0.0%	100%
3-4 グループワークに対する興味・関心が高まった	19	16	0	0	35
	54.3%	45.7%	0.0%	0.0%	100%
3-5 他者の立場に立って他者を理解できるようになった	13	22	0	0	35
	37.1%	62.9%	0.0%	0.0%	100%
3-6 ファシリテーションに対する興味・関心が高まった	14	20	0	1	35
	40.0%	57.1%	0.0%	2.9%	100%
3-7 プログラムをーから企画することに対する興味・関心が高まった	11	19	3	2	35
	31.4%	54.3%	8.6%	5.7%	100%
3-8 他者の意見に耳を傾けられるようになった	20	15	0	0	35
	57.1%	42.9%	0.0%	0.0%	100%
3-9 自身がより規則正しい生活を送れるようになった	5	11	11	8	35
	14.3%	31.4%	31.4%	22.9%	100%
3-10 他者とコンセンサスを得ながら納得を促せるようになった	7	23	5	0	35
	20.0%	65.7%	14.3%	0.0%	100%
3-11 人前で話す際には、事前に準備して臨むようになった	12	21	1	1	35
	34.3%	60.0%	2.9%	2.9%	100%
3-12 他者の意見を引き出すことができるようになった	10	17	7	1	35
	28.6%	48.6%	20.0%	2.9%	100%
3-13 新しく人間関係を作ろうという意欲が高まった	14	12	9	0	35
	40.0%	34.3%	25.7%	0.0%	100%
3-14 ファシリテータとしてグループにどう関わるべきか、考えられるようになった	19	13	3	0	35
	54.3%	37.1%	8.6%	0.0%	100%
3-15 自身の大学生活への意欲が高まった	14	14	6	1	35
	40.0%	40.0%	17.1%	2.9%	100%
3-16 他者の学びや成長を促すためのアプローチをとれるようになった	6	23	6	0	35
	17.1%	65.7%	17.1%	0.0%	100%
3-17 人とかわかることに対する意欲が高まった	18	13	3	1	35
	51.4%	37.1%	8.6%	2.9%	100%
3-18 自身を客観的に見つめ自身の行動を変えられるようになった	8	19	7	1	35
	22.9%	54.3%	20.0%	2.9%	100%
3-19 人前で話す際に、聴衆の目を見て話せるようになった	10	15	9	1	35
	28.6%	42.9%	25.7%	2.9%	100%
3-20 自分の意見を他者に伝えられるようになった	11	18	6	0	35
	31.4%	51.4%	17.1%	0.0%	100%

図 4. 学生ファシリテータ活動を通じた成長実感

意見を他者に伝えられるようになった)が実感されている。

4.3. 学生ファシリテータ活動への対価に関する意識

最後に、学生ファシリテータ活動に対価が必要か否かについて問うている2つの設問とその回答理由を問うた設問についての結果を述べる。

4.3.1. 対価としての単位について

「4-2.『自己発見と大学生活』授業支援の対価として単位があると良いと思う」について、ポジティブに回答したのは、37.1% (13名)であった。「そう思う」「どちらかというと思う」「どちらかというと思う」「どちらかというと思う」の四件法で問うており、その回答理由について尋ねた設問(4-3、4-4)に対する回答をそれぞれ最も文字数の多いものを例として掲載する。

(1) そう思う:自身の授業もある中で、自己大⁴⁾に対して授業以外の時間を多く費やすことになるので、対価があっていいと思う。さらに、学ファシとしての自覚が、単位を貰うことで更に高まると考える。

しかし、単位を貰うために学ファシを志望する人が増えてしまう懸念がある。そして、単位を対価とするならば、何を基準に単位を認めるのか、その判断は誰がするのが問題となる。もし、学ファシへの単位も担当教員が評価するとなれば、授業支援のはずが、むしろ負担を増やすことになってしまう。

とても、判断の難しいことであるが、私は学ファシの活動には、単位ほどの価値があると考えてるので、前項に「そう思う」と答えた。

(2) どちらかというと思う:授業時間外における準備やフィードバックの時間が思ったより必要であることを実感し、単位があってもいいのではないかと感じたため。

(3) どちらかというと思う:打ち合わせや振り返りに費やす時間は他の授業以上で頑張った分単位が欲しいと思わなくもないが、とりあえず打ち合わせや授業に参加しておけば単位がもらえると考えて事前準備や当日の運営が雑になり授業のクオリティが下がる可能性があるため。

(4) そう思わない:2年前の、Aさん、Bさん、Cさん²⁾の代でも同じ話が出ていたと思いますが、単位をだすことは反対です。

理由としては、自己発見と大学生活で学生ファシリテータが行うことは、あくまでも受講生のサポートであると考えています。一般教養の授業のようにテストや課題³⁾ないにも関わらず、単位を

対価とするのはなしだと思います。

また4-7⁴⁾と共通することではありますが、今の学ファシになる人の志望動機は、「人前で話せるようになりたい」「ファシリテーションを学びたい」など自分がやりたいことがあって入っている人が多いと感じています。

しかし単位を出すことによって、単位目当てで学生ファシリテータになる人が出るのではないかと考えています。この志望動機から始まる、活動に対する目的のズレが出ることはあまり良いこととは思えません。

4.3.2. 対価としてのアルバイト代について

「4-5.『自己発見と大学生活』授業支援の対価としてアルバイト代が出ると良いと思う」について、ポジティブに回答したのは、17.2% (6名)であった。4.3.1の単位についてと同様に、回答理由について文字数の最も多いものを例として掲載する。

(1) そう思う:個人的にはオープンキャンパスのスタッフが出るのだから出ても良いのではないかと思う。

(2) どちらかというと思う:最初はアルバイト⁵⁾欲しさかもしれないが、意欲が出て自然に受講生たちをサポートすることを頑張ろうとするかもしれないから。

(3) どちらかというと思う:授業支援に関しては単位認定と同様あまり気が進まない。

学ファシはあくまでボランティアなのであって、そこがポイントだと思う。堅苦しくなく、さまざまな立場の学生が、ラフな関係性で受講生と関わるからこそ学ファシの役割を果たせるのではないかと感じる。

(4) そう思わない:(前略)アルバイト代を出すか出さないかの議論になる際に論点となっているのが、学ファシの授業に対するタスクの多さがあると思います。また、場合によっては1つの授業を学ファシがすべて運営している⁶⁾のに、ただのボランティアとして活動するには労力が大きいといった話が上がると思います。

しかしながら、多くの労力がかかるのは初回から5.6.7回授業までだと思っているので、ポスター発表の回に入ってくると見まわることしかできない⁷⁾ので、それらに対してアルバイト代が出るのは申し訳ないと思います。

4-4⁸⁾にも書きましたが、モチベーションの違いも出てくると思います。お金をもらう以上しっかりとした準備をしなければならないという使命感から、授業の質が上がることもあるかもしれませんが、お金で人を釣るようなことはプラスにも、マイナスにも働くと思うので、自分は反対します。

もう一つ反対する理由として、(中略) アルバイト代の算出方法⁹⁾があります。

学ファシは授業時間も、もちろん活動しますが、どちらかというとなら授業の前に準備する時間のほうが多い場合があります。

先週の振り返り、来週の役割分担、説明のPP、課題の例、アイスブレイクは何をするのかなど、準備に時間が必要な中で、今のSAのアルバイト代の算出方法では、事前準備に対してはお金が出ないので、学ファシの労力の対価をアルバイト代で賄うことができないと思います。

事前準備もアルバイト代が出るようになったとしても、担当教員や学ファシによって準備する時間などは全く違うので、稼ぐ学ファシ、稼がない学ファシが出ることを考えると、お金は出さないほうが良いと思います。

以上が、単位およびアルバイト代に関する学生ファシリテータの意識に関する結果の報告である。

なお、本調査はMicrosoft Formsを使用したものであり、多くの学生ファシリテータがスマートフォンから回答したであろうと推測される。このため、文章の推敲などは行われていないであろう点を差し引いて確認して頂きたい。

5. まとめと考察

本稿では、3.にて述べた調査結果から、「自己発見と大学生活」において、受講生が「他の受講生とのやり取り」に次いで、学生ファシリテータの存在が「大学に親しみを感じること」「他学部の学生・学問内容に興味を持つこと」「自学部の学生・学問内容に興味を持つこと」に貢献していると評価していることをみた。さらに、受講生は「他の受講生とのやり取り」を支える学生ファシリテータの働きについて、概ねの項目で9割の学生がポジティブに評価していることをみた。このことから、学生ファシリテータが「自己発見と大学生活」の運営上、受講生にとって欠かせぬ役割を果たしていることを確認できた。

その上で、4.にて述べた調査結果から、受講生との関係性に関する満足度について、学生ファシリテータの8割以上が全5項目で満足していること、および「学ファシ活動をして良かったと思う」という総合的な満足度を問う項目で100%の学生ファシリテータが満足していることを確認した。さらに、学生ファシリテータ活動を通じた成長実感について、「3-9. 自身が規則正しい生活を送れる

ようになった」という生活リズムに関する質問を除く19項目で7割以上の学生ファシリテータが成長を実感していることを確認した。

これらのことから、学生ファシリテータは受講生とのやり取りの中で、受講生や自身の成長を実感して活動に満足していると言える。このような成長実感が、「自己発見と大学生活」における学生ファシリテータ活動の参画意欲の主たる部分を形成しているだろうことは想像に難くない。

一方で、主に本科目の関係教職員から、これほど重要な役割を果たす学生ファシリテータが、果たして無償のままで良いのだろうかという疑問の声が毎年上がっている。このため、例年行う本報告に掲載した調査において学生ファシリテータ自身に有償化や単位化について希望調査を実施し、過去には個別のヒアリング調査なども実施してきた。しかし、過年度に行ってきた調査においても有償化や単位化に賛成する学生ファシリテータが、反対する学生ファシリテータの数を上回ったことはない。

参考までに、「第12期(次期)も学ファシ活動を続けようと思っていますか。現時点での気持ちでお答えください」という設問と、単位/アルバイト代の要/不要に関する回答のクロス集計結果を図5に示す。単位については、継続意思があると回答した21名に賛成が8名、継続意思がないと回答した11名にも賛成が5名いる。アルバイト代については継続意思があるもの、ないもの、どちらも3名ずつ賛成がいる。このような結果をみると、継続・非継続に単位・アルバイト代に関する意見は特段の影響をしていないように見える。ただし、4年次生まで(活動限界まで)学生ファシリテータを継続した3名は、単位/アルバイト代のいずれも全員反対に票を投じている。

さらに、アルバイト代の要/不要と、単位の要/不要に関する項目でクロス集計をしてみると、図6が得られた。単位は反対だが、アルバイト代は賛成と回答したのは1名のみで、それ以外の者はどちらも反対(21名)、単位のみなら賛成(8名)、または単位もアルバイト代も賛成(5名)と回答している。回答者35名のうち、21名(60%)が、どちらも反対と考えている点は興味深い。

次年度からの活動に関わることができない4年次生3名を当事者としてカウントしなかったとしても、51.4%の18名がどちらも不要と回答している。

このような結果について、日頃から学生ファシリテータの活動をサポートし、個別面談なども担当しているF工房担当職員3名は、本稿で取り上

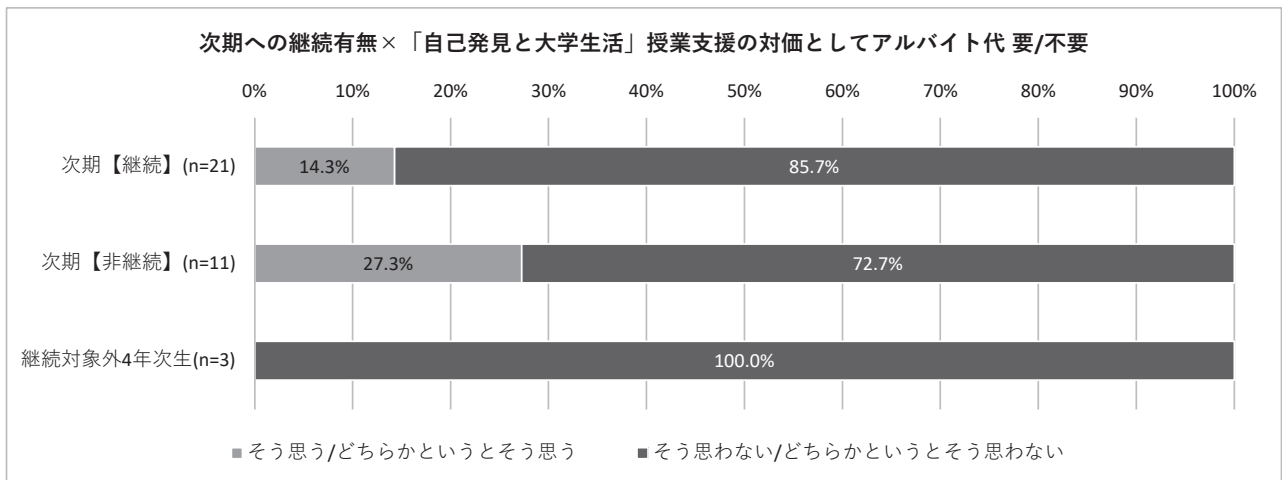
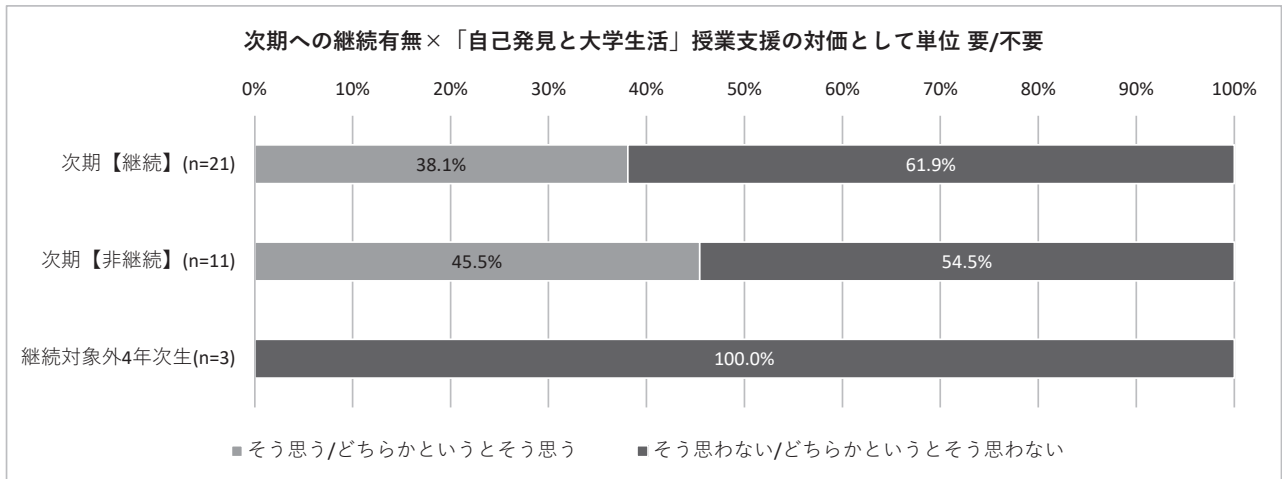


図 5. 次期への継続意思と対価への意識 (クロス集計)

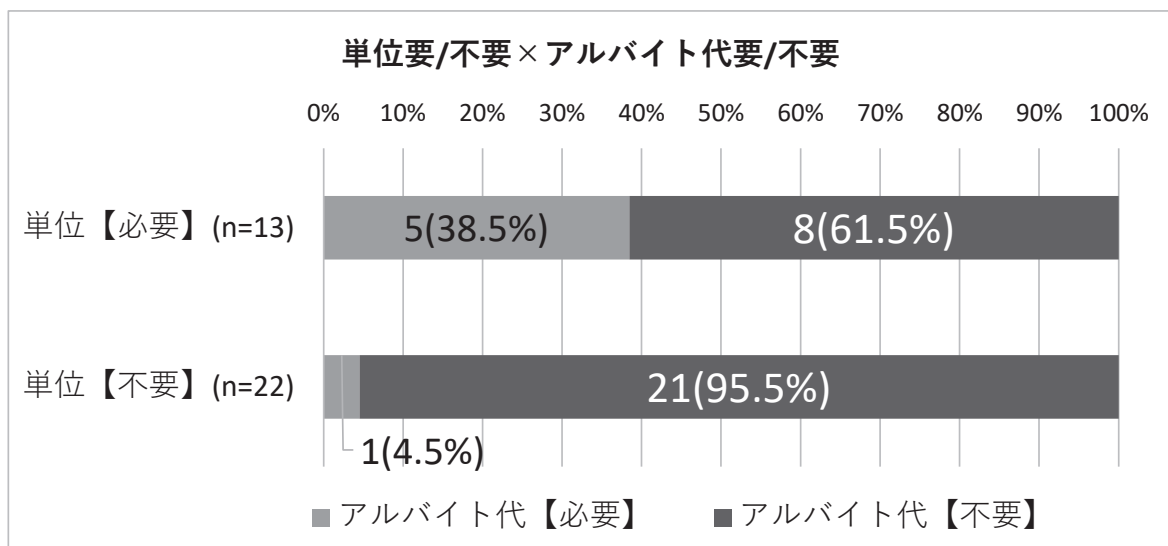


図 6. 単位の要/不要とアルバイト代の要/不要 (クロス集計)

げた 4.3 に掲載した理由以外の自由記述全てに目を通し、以下のように考察した。

・単位制の導入に賛成の意見は、大きく「授業準備に時間がかかっているから」「対価があることがモチベーションになるから」「責任感を持って取り組めるから」の 3 つに分類できる。とりわけ、単位に相当するだけの学びがあるという記述が見られ、だからこそアルバイト代は不要であるという考えに繋がっているように見受けられる。

・学生ファシリテータの志望動機として、先輩学生ファシリテータへの憧れや、自身の成長のため、友達を増やしたいなどの動機が一般的であり、そのような自分ごととしての学生ファシリテータ活動に対価を求める声が大きくなりやすいのではないかと。アルバイト代に賛成する記述は、「出てもいいと思う」などの記述であり、「そうあるべき」「そうでなければおかしい」といった問題意識は見られない。

・学生ファシリテータにとって、自ら得る学びや成長が活動の対価であるため、その他のものは不要である、という考えの記述が多く、特に「そう思わない」と回答する学生ファシリテータのなかには、そのほかの報酬に対し否定的な考えを示す学生も多い。これは「同じ活動を通して人それぞれ独自の価値を見出している」という実感から、対価・報酬が定められることによってその独自性が失われることを懸念しているのではないかと。学生ファシリテータ活動を通して、経験学習の多様性（同じ経験をしなくても感じること、考えることは人によって違い、それによって得られる学びも人それぞれに違うこと）を感覚的に理解した結果ではないかと。

これらを踏まえると、有償化や単位化といった対価に見合う、あるいはそれ以上の活動を担っているという、ある程度の自負がある一方、有償化や単位化を制度的に導入するデメリットに対する強い反発があると解釈するのが現状の妥当な解釈であろう。

翻って今一度現場を見れば、現状の「自己発見と大学生活」の学生ファシリテータは、その個人の持ち味を生かし、教員との組み合わせによって自在に立ち位置を変えている。一般的な関わり方として、ティーチング・ガイドブック（運営マニュアル）にはアイスブレイクの進行を中心に記載されているものの、学生ファシリテータの活動はそれに縛られてはいない（『ティーチング・ガイドブック』は厳正にマニュアル化されていて、教員と学ファシ間での授業のアレンジがしにくかった）に、肯定的に回答した者は 3 名のみで、35 名

中 32 名（91.4%）が否定的に回答している）。学生ファシリテータによってはグループワーク中の支援に力を入れ、積極的に発表内容に立ち入って、ファシリテータというよりは SA 的な関わりで助言する者がいたり、受講生にできるだけ授業とは直接関係しないことで積極的に声を掛けて親しみやすい・話しかけやすい環境を作ることを中心とし、進行にはそれほど関わらない者もいる。それらの全ては、受講生・教員との対話の中で、振り返り（自己内対話）を挟みながら、よりクラスに適した形を模索して実行されていく。

学生ファシリテータの記述を再度みると、4 に紹介した「堅苦しくなく、さまざまな立場の学生が、ラフな関係性で受講生と関わるからこそ学ファシの役割を果たせるのではないかと」の記述の他にも、「お給料をもらってしまうと、思いやりの言動が仕事になってしまうから。『したい』が『しなければならぬ』になってしまうから」「サークルに近い感覚で取り組んでいるので、制度が変わると趣旨が変わる」「単位が認定されるようになったら、気楽に取り組むことができるという雰囲気はなくなってしまうし、学ファシの雰囲気がもっと堅苦しいものになってしまう」とある。

他の授業や就職活動、他の課外活動との兼ね合いの中で、学生ファシリテータが「楽しく」「効果的に」関わるためには、学生ファシリテータの記述にあるように「気楽に」「堅苦しくなく」「ラフに」関われる制度を維持し、多様な関わり方を歓迎する雰囲気こそが、参画意欲の維持・向上に何よりも必要な素地となっているのかもしれない。

謝辞

本稿にて使用した「学生ファシリテータ効果調査」にご協力くださった「自己発見と大学生活」の受講生の皆様、「学生ファシリテータ活動状況・成果調査」にご協力くださった学生ファシリテータの皆様に、厚く御礼申し上げます。

注

- 1) 自己発見と大学生活の意
- 2) 筆者による匿名
- 3) 「が」の脱字と思われる
- 4) アルバイト代の要不要に関する理由
- 5) 「代」の脱字と思われる
- 6) 1 コマの主進行を学生ファシリテータが担当する場合のことだと思われる
- 7) ポスター発表準備ワーク（授業後半）の期間を指す。当該期間は学生ファシリテータは各グルー

プの見回りと介入による支援を活動の中心としており、それだけでも受講生や教員は十分に支えられている面がある。また、当該期間であっても複数質問への回答やよくある悩みについてのミニレクチャーを担当することもある。

8) 単位の要不要に関する理由

9) 授業1コマにつき、1.5時間×時給で計算する方法

参考文献

中沢正江, 松尾智晶 (2017) 自己発見と大学生生活. ナカニシヤ出版, 京都

西山宣昭 (2010) 第4章初年次教育. 早田幸政, 諸星裕, 青野透編. 高等教育論入門 - 大学教育のこれから -. ミネルヴァ書房, 京都

The analysis of student facilitators' motivations in a first year experience program

Masae NAKAZAWA¹, Kazumi OSHIMA²,
Tomomi MIYAZAKI², Mai NAKAO²

Recently, many student staff have been actively committed in various first year experience programs, and have supported first year students.

In this research, we analyze the motivations of support activities of student staff (called “student facilitator”) in “Jikohakken to Daigakuseikatsu”, that is the first year experience program in Kyoto Sangyo University.

In particular, we review questionnaire data of the effect of student facilitators on their support activities for first year students, and check questionnaire data of student facilitators' activities and learning outcomes. In this paper, we analyze the data mentioned above, focusing on motivations for support activities.

KEYWORDS: Student Staff, Motivation, First Year Experience, Facilitation

2021年12月22日受理

1 Institute of General Education, Kyoto Sangyo University

2 The Facilitation Studio (‘F-Kobo’), Center for

Research and Development for Educational Support Office, Kyoto Sangyo University

